

KELES Newsletter

関西英語教育学会報 2026年度 第1号

事務局: 〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698-1

大阪教育大学 多文化教育系 篠崎文哉研究室内

E-mail: kelesoffice@gmail.com 学会ウェブサイト: <https://www.keles.jp/>

2026年7月31日発行



巻頭言

グローバル化社会・生成 AI の時代こそ「ことばの教育」を

関西英語教育学会会長 横川 博一（神戸大学）

生成 AI の登場・発展は、学校教育の存在価値を大きく揺さぶっています。英語教育も例外ではありません。それはどこかの誰かの話ではなく、自分の授業にも降りかかってくる切実な問題です。

私自身、4月から始まる授業を前に、とても悩みました。これからの世の中を生き抜く学生たちに、この科目を通して教えるべきことは何か、学生たちが学ぶべきものは何か。私が担当するのは、リーディングを中心に4技能を統合的に学ぶ、大学1年生対象の全学共通英語科目「Academic English Literacy」。生成 AI などを活用すればすぐに母語に翻訳してくれる時代に、英語で「リーディング」することにどんな意味があるのか、何度も何度も自問自答しました。

「外国語を学ぶことは異文化への窓である」とか、ゲーテの「外国語を知らない者は母語についても何も知らないのと同じだ」ということばがいつも私の心のどこかにあります。グローバル時代に重要な力は、外国語学習を通じた異文化の理解であり、それは一人一人が身につける以外にはありません。

高校までに触れる英文の多くは、書き下ろしの文章で、論理も比較的単純かつ基本的なものです。しかし、人を魅了する文章のレトリックはもっと多様で複雑です。だから大学生には、authentic で、いい文章に触れてほしい、味わってほしいと思いました。

そして、背景情報や自分が持っている知識と母語の知識などを総動員して、英語と struggle with してほしいと思いました。文章の意味を真に理解し、「状況モデル」をきちんと描くことは、単なる記号から記号への置き換えでは到底達成できません。文

章と真摯に向き合い、著者と対話してみることが不可欠です。そして、このような経験を通じてこそ、コミュニケーション力が養われ、英語を英語のまま理解することも可能になるのだと思います。

今年のある春ドラマの中で、こんなセリフに出遭ったんです（若干改変）。

A（久慈）：‘Song of Spring’ お前ならどう訳す？

B（吾妻）：なんだよ、いきなり。まあ、ふつに「春の歌」とかじゃねえの？

＊

B: 翻訳ってさ、そのまま訳すんじゃないんだよなあ。ニュアンスとか。物語の雰囲気とか。

A: そりゃ、そうだろう。

B: そうなんだけどもさ。あんまり深く考えたことなかったから。おもしろいよな。pink を「ほんのり赤い」とか。

＊

A: 「電車に乗ってロンドンまで出る」ってあるけど、この時代の train はホントに「電車」か？ディーゼルなら「列車」だし、下手したら「汽車」も走ってそうだけど。ああ、あと、ここ。

「小窓からトウモロコシ畑が見える」ってあるけど。イギリス英語だと ‘corn’ は「小麦」だ。

B: えっ？そうなの？

＊

B: あのさ、ずっと考えてたんだけど、‘Song of Spring’—「雪解けの歌」は？

A: いいねえ ...。

こんなことばの学習が、コミュニケーション力育成の強化にも大きな意味をもつと思うのです。

報告 関西英語教育学会 第32回研究大会

開催日：2026年6月13日(土)・14日(日) 会場：大阪教育大学 天王寺キャンパス

6月13日(土)、14日(日)に、第32回研究大会が開催されました。今年、竹内理先生、内田諭先生によるご講演をはじめとして、4件の企画ワークショップ、研究発表・事例報告13件があり、盛会のうちに終了しました。149名の方々にご参加いただき活発な議論が展開されました。講師をお引き受けくださった先生方をはじめ、ご発表くださった皆様、参加してくださった皆様、会場を提供くださり事前のご準備等にご尽力くださった皆様に心から感謝申し上げます。

<13日(土) 企画ワークショップ>

「AI時代におけるライティングの指導と評価：

思考訓練の場としてのライティング再考」

講師：山西 博之先生(中央大学)

山西先生はまず、生成AIの急速な発展によってライティング教育が大きな転換点を迎えていることを指摘された。AIが高品質な文章を生成できる時代において、ライティング教育の目的を単なる文章産出能力の育成として捉えるのではなく、学習者が読み手・目的・状況を踏まえて判断を行う「思考訓練の場」として再考する必要性が示された。

その上で参加者による実践タスクが行われた。その①は「炊飯器出品タスク」で【状況】は「アメリカでの1年間の留学を終えるあなたは、日本に持って帰らないものを、学内のgarage sale(不用品売買)サイトで売ることにしました。帰国日は決まっているので、上手に宣伝して早めに片付くと嬉しいなと思っています」ということで【課題】は「愛用していた炊飯器をこのサイトで売ってください」というものだった。書く前に考えることとして、

1. Why am I writing this? To whom should I write?

(何の目的で書くのか=どんなことを期待して書くのか→誰に(どんな関係の人に)書くべきか)

2. How am I writing this? (どんな手段で伝えるのか、どんな形式で書くのか、どんな感じで書くのか)

3. What (and how much) should I write? In what order? という3点をまず5分間で各自がワークシートに記入して、次に近くの席の人と情報交換する

というワークショップだった。

実践タスク例②は【状況】として「アメリカの大学に留学中のあなたは、指導教員 Professor Miller との面談の約束の日を1日間違えてしまい、予定されていた今日の面談をすっぽかしてしまいました。謝罪し、再度面談をお願いしたい」ということで【課題】は「ミラー教授に謝罪とアポ取りのメールを書いてください」というものだったが、これについてのワークショップは時間の関係で割愛された。

まとめとして、形成的評価・形成的指導の根拠としてAIを活用すること、プロダクト評価では、課題の目的に応じて、既存のライティング評価用ルーブリックを利用できることが指摘された。「とりあえず書かせる」のではなく、学習者自身の思考プロセスにおける判断に基づいて、生成AIへの指示を自分の意図や言葉で具体化することができること、そして生成AIの出力は、最終プロダクトとしてそのまま受け取るのではなく、学習者自身の思考プロセスにおける判断に照らして批判的に検討する対象になることで結論とされた。

本ワークショップは大学でのライティングの授業がベースになっているが、私のように高校で教えている者でも、「論理・表現」の授業でライティングさせる際に、生成AIに丸投げしている生徒が多く見受けられる。生徒が具体的に分かりやすいプロンプトでAIに語りかけられるように指導することの必要性が示唆されたワークショップであった。

報告者：奥野 久(大阪府立茨木西高等学校)

「教室内談話とフィードバック

—学びのための教室と教師—

講師：名部井 敏代先生(関西大学)

発表の冒頭では、名部井先生が教室談話研究に関心をもつ契機を紹介された。黒人児童と白人児童の「Show and Tell」の発表を比較した研究では、白人児童は提示物に沿って説明する傾向がある一方、黒人児童はより自由に語りを展開し、話題が提示物から離れていく談話の特徴が見られたという。その結果、学校教育においては前者の語り方が高く評価

される傾向があり、学習者の能力そのものではなく、教室内で共有される価値観や談話のあり方が評価に影響を及ぼすという視点は、名部井先生が教室談話研究に関心を抱く大きな契機となったという。

続いて、フィードバックについて議論が行われた。口頭訂正フィードバックには、明示的訂正、リキャスト、誘導、明確化要求、メタ言語の手がかりなど様々な種類があり、それぞれ異なる特徴をもつため、目的に応じて使い分けることが重要であるという。また、フロアからの意見を交えて、学習者に気づきを促すためには、ジェスチャーやイントネーションなども有効であることが指摘された。

さらに、教師と学習者の間にはフィードバックに対する認識のずれが存在することも紹介された。教師は学習者が訂正を嫌がると考えがちである一方、多くの学習者は訂正を望んでいる。また、教師が意図したフィードバックが必ずしも学習者にその通り受け取られるとは限らない。興味深いことに、アンケート調査ではリキャストを誤りの指摘として認識する学習者が多く、これまでの学習経験による影響があることも示唆された。さらに、学習者が最も好ましいフィードバックとしてリキャストを挙げていたことも印象的であった。

発表では、教室談話の代表的構造である IRF (Initiation-Response-Feedback) についても議論された。IRF は教師主導になりやすく、学習を閉鎖的にするという批判がある一方で、学習者に安心感を与えたり理解確認を行ったりするうえで有効な側面もある。重要なのは、その形式自体ではなく、教育的目的に応じて適切に活用することであると述べられた。

また、教師の言語使用を振り返る枠組みとして、Walsh (2006, 2011) による SETT フレームワークが紹介された。教師は自身の Teacher Talk を分析し、授業目的との適合性を検討することで、教室談話を改善できるという。

最後に、生成 AI がフィードバックを提供できる時代において、教師には学習者と対話しながら学びを支援する役割が一層求められることが指摘された。反転授業や AI によるフィードバックを活用しながら、授業では referential question を用いた対話を充実させることの重要性が強調された。

本発表を通して、フィードバックは個別の訂正技法ではなく、教室談話全体の中で捉えるべきもので

あることを改めて認識した。また、AI 時代だからこそ、学習者との対話を通して学びを支援する教師の役割の重要性について深く考えさせられた。

報告者：宮崎 貴弘（神戸市立神港橘高等学校）

<13 日（土）講演>

「AI 時代における英語教育研究

—分散知・メタ認知・透明性・エコロジー—

講師：竹内 理先生（関西大学）

竹内先生のご講演では、Artificial Intelligence (AI) の急速な進展が続く現代社会において、教育者や研究者が今後どのように AI と向き合うべきかをテーマにお話いただいた。本講演は主に AI 活用の初級者や、これから AI の活用を検討している教育者や研究者を対象としていると前置きがあったが、その内容は日常的に AI を活用している参加者にとっても示唆に富むものであった。講演中は終始和やかな雰囲気に入れられ、参加者が笑顔で耳を傾ける姿が印象的であった。

講演の冒頭では、AI を取り巻く社会的状況について説明がなされた。教育現場ではこれまで、「知識」→「技能」→「問題発見」の順で学習観が構成されてきたが、AI 時代においては「問題発見」→「技能」→「知識」という新たな順序へのパラダイムシフトが生じる可能性が指摘された。また、教員の多忙化が深刻になる中で、教育活動や研究活動を持続可能かつ効率的なものとしていくためにも、AI をうまく活用することの重要性が述べられた。

続いて、加速する AI の進展について紹介があった。大学入学共通テストなどを例に、人間と AI の得点結果を比較しながら、近年の AI の性能向上が著しいことが示された。一方で、その進展は単なる利便性の向上にとどまらず、新たな課題や問題点を伴うことも指摘された。先行研究をもとに、AI への過度な依存がメタ認知や主体性、自己調整能力の低下につながる可能性があることを紹介され、AI 活用の大きなリスクが強調された。

一方で、人類はこれまでも自動車や電話、電卓、パソコンといった技術革新に適応しながら社会を発展させてきた。こうした歴史的経緯を踏まえると、AI についても社会や教育の中に適切な形で取り入れながら活用していくことは十分可能であるとの見解が示された。その上で、AI を排除するのではなく、人間と AI がそれぞれの役割を理解しながら

思考を分担し、協働していく「分散知」の考え方の重要性が説かれた。また、このようなパラダイムの変化を踏まえ、従来の学習観や教育観を見直し、その在り方を再考する必要性についても言及された。

これらの点を踏まえ、最後に、研究活動におけるAI活用の可能性について、先行研究や参考資料を踏まえながら、1) 研究アイデアの創出、2) データ収集、3) データ分析と解釈、4) 論文執筆・研究発表準備、5) 研究倫理という5つの観点から具体的な紹介が行われた。事例を交えた説明を通して、研究活動のさまざまな場面においてAIが有効な支援ツールとなり得ることが示された。一方で、その利便性だけでなく、ハルシネーションや研究不正のリスクについても言及があり、AI活用における記録の保持や透明性の確保、さらに研究者自身が批判的視点を持ち続けることの重要性が強調された。

竹内先生のご講演は、AI時代における教育および研究の在り方について、社会的背景から研究実践、さらには研究倫理に至るまで包括的に捉え直す貴重な機会となった。英語教育研究におけるAI活用の可能性と課題が具体的に示されるとともに、人間とAIの協働を前提とした新たな研究実践の方向性が提示されており、今後の研究を考える上で多くの示唆を与える内容であった。特に印象的であったのは、AIを単なる便利なツールとして捉えるのではなく、人間が主体性やメタ認知を維持しながら、AIと協働する分散知の在り方を模索していくことの重要性である。AIの進展が加速する今だからこそ、研究者自身が何を考え、何を判断し、何を問い続けるのか。その本質的な問いを改めて投げかける講演であった。

報告者：上野 将太郎（神田外語大学）

<14日（日）企画ワークショップ>

「読み方を学ぶ読解指導の実践

—文法知識の使い方から長文読解まで—

講師：濱田 彰先生（神戸市外国語大学）

石原 健志先生（大阪星光学院中学校・高等学校）

「文法の指導、読解の指導はされておられると思います。しかし、習った文法知識を読解で使えるように、文法指導と読解指導の間にもうワンステップ、scaffolding（足場かけ）をしてあげないといけません。」

今回のワークショップで、濱田先生・石原先生が

熱く語っておられたメッセージである。これに衝撃を受けたのは私だけではないはずだ。実践でうまく足場かけができていない、または苦戦されている先生も少なくないのではないか。なるほど、ではどうすればその足場かけができるのか。その具体的な方法を教えてくれたのが今回のワークショップだ。

前半の石原先生曰く、文法を読解につなげる指導の基本サイクルは、「本文中読み難いと感じる文の文法・語法を特定させる」→「その文法を『総合英語』で生徒に自分で確認させる」→「本文に戻り、文法項目を取り出して意味を理解させる」→「パラグラフの読解へ」という流れだ。「知識の転移」つまり、文法の明示的知識としてインプットするだけでなく、読解で再遭遇したものを『総合英語』で確認させ、その知識を長文読解でアウトプットできるようにすることが大切だと言う。

次に、実際に例文を使い、生徒はどの部分を読み難いと感じるか、読み難い文法事項にはどのようなものがあるか、そして、文法を読解で応用させるために教師は何をすべきか考えた。高校生の場合、分詞構文や関係代名詞、形式主語、知覚・使役、完了形等が含まれていると読み難いと感じるようだ。石原先生は、『総合英語』で生徒に文法を確認させ、調べたページに付箋を貼る様指導し、いくつかの文法事項の「まとめプリント」をAIで作成し、復習させると報告しておられた。

後半の濱田先生は、読解指導のポイントについて具体例を交えながら教えて頂いた。濱田先生曰く、「教えていない授業」には、目的を与えず読ませる、内容理解の答え合わせをするだけ、訳を確認するだけ、感想を言うだけの授業、等があるそうだ。このような「教えていない授業」にならないようにするにはどうすればいいか。この点、濱田先生は、内容理解テストの代わりに適切な発問（誘導質問）により“理解の仕方”を教えることが大切であるという。例えば Which statement is true?だけでなく、Which words help you decide?と聞くことで、生徒は読む目的を与えられ、戦略的に読むようになる。これを、読む前・読みながら・読んだ後で問いを変えながら、例えばグラフィックオーガナイザー等を使い、そこに書き込むタスクをこなしながら読ませる。発問の仕方でも、例えば、生徒は長文のディスコースマーカー（first, second 等）にも注目して読むようになり、これは学習指導要領の「情報を判別す

る」力にもつながるという。

吸い込まれるように1時間が経っていた。今回は日曜日朝9時半開始であったが、大教室がほぼ満席になるほど大盛況であった。実践に役立つお話を聞き、皆さんご自身の学校でも、文法から読解へつなげる指導をされることだろう。

報告者：大槻 有佳子（神戸市外国語大学）

＜14日（日）企画フォーラム＞

「学会誌採択に向けたポイント

—研究論文・研究ノートの質向上を目指して—

講師：佐藤 臨太郎先生（奈良教育大学）

今野 勝幸先生（龍谷大学）

三上 明洋先生（関西学院大学）

本講演では、学会誌への採択を目指す研究論文・研究ノートの質向上に向けて、「研究テーマ設定」

「分析結果の報告」「授業実践研究・質的研究の書き方」という三つの観点から具体的な示唆が提示された。修士課程1年次であり、今後修士論文の執筆に取り組んでいく立場として、研究の進め方や論文のまとめ方について多くの学びを得ることができた。特に印象に残ったのは、論文は単に「正しく書く」だけではなく、「読み手にわかりやすく伝える」ことを意識する必要があるという点である。

佐藤先生の発表では、研究テーマ設定における「妥当性・実行可能性・持続可能性」という三つの視点が示された。これまで私は興味や関心を出発点として研究テーマを考えがちであったが、先行研究との関係性や教育的意義を踏まえて研究課題を設定することの重要性を学んだ。また、データ収集や分析が現実的に可能であるか、限られた時間の中で継続して取り組めるかという視点も重要であり、今後論文のテーマを考える際には、「明らかにしたいこと」と「実行可能なこと」の両方を考慮する必要があると感じた。さらに、先行研究の整理から研究課題、分析、結論へと至る一貫した流れが、読み手の理解を支える基盤になるという点も印象的であった。

今野先生の発表では、分析結果の報告において「何が明らかになったのか」を明確にすることの重要性が強調された。統計的手法を用いること自体に意識が向きやすいが、重要なのは分析結果をどのように解釈し、研究課題と結びつけて説明するかである。また、結果として示される事実と、考察として

述べる解釈を区別する必要性についても、今後意識したい。単に数値や結果を示すだけではなく、「なぜその結果が重要なのか」を伝える力が必要であると感じた。

三上先生の発表からは、授業実践研究を書く際の視点について多くの示唆を得た。授業実践を研究としてまとめるためには、活動内容や生徒の反応を記録するだけではなく、明確な目的や分析の枠組みを設定し、その実践から何を明らかにするのかを示す必要がある。特に、アクション・リサーチにおける「計画・実践・省察」のサイクルや、質的データの分析過程をどのように論文として整理するかという点は、今後の重要な課題であると感じた。

本講演を通して、論文執筆とは研究成果を記録するだけではなく、「何を明らかにし、それをどのように読み手へ伝えるか」を考える過程であると再認識した。今後、研究テーマを具体化し、修士論文に向けて研究を進める中で、先行研究を踏まえた問いの設定、実現可能な研究計画、そして一貫性のある論文構成を意識しながら、説得力のある研究としてまとめていきたい。

報告者：高崎 友理奈（神戸市外国語大学大学院生）

＜14日（日）講演＞

「生成AIを活用した英語発信力の 育成支援と自動評価」

講師：内田 諭先生（九州大学）

これまで開発されてきた CEFR-J レベルを自動判定する CWLA(Corpus-based Writing Level Analyzer) や CVLA(Corpus-based Vocabulary Level Analyzer)による「書く」「読む」の自動評価に加え、CSLA(CEFR-based Speech Level Analyzer)による「話す」自動評価を加えた CLaLAの開発について、最新の世界的な研究動向や研究成果を提示しながら、参加者と共に実際に CLaLA を使い、生成AIを活用した英語発信力の育成について、まさに研究の現在地を示された。

はじめに、AIによる評価に関するメタ分析結果から、「書く」「話す」自動評価研究について、AWE(Automated Writing Evaluation)は有効だが補助ツールとして使うべきで、論理や一貫性、議論構成には効果が限定的であると指摘した一方で、ASR(Automatic Speech Recognition)は、発音練習にかなり効果があったとした。ただし、母音などの音

韻について限界があり、評価できる範囲は限定的であると補足した。

次に、指標を使う従来型の評価と指標を使わない LLM(Large Language Model)型とを比較し、従来型では、語彙・規範など表層的な評価を得意としている一方で、指標を使わない LLM 型の GPT 系では構成や文体など高次の評価が得意であるとした。また、従来型の評価では用例を挙げると効果がある上、両極端の例を挙げるとより効果があるとし、教員の採点も再現できる従来型の良さも取り上げた。このことから、従来型と LLM 型の両者が補い合うハイブリッド型の研究も近年行われていることについて言及した。

続いて、CVLA3.1、CSLA、CWLA2.2 の機能や語彙指標、統語指標、評価の精度について説明があった。CVLA3.1 によるリーディングテキストの分析では海外出版のテキストの準拠例でも大きなズレがないことが報告された。また、CVLA3.1 に新たに追加されたリスニングモードの精度については課題があるが、Monologue (1 人の話し手によって継続的に行われる発話・音声テキスト) は少し難易度を高めて出した場合には CEFR レベルの評価と合致することがわかっているとした。

また、CWLA2.2 におけるスコアの仕組みとして、AI のみの評価ではスコアが偏る傾向が見られたため、CWLA2.2 では語彙指標と AI を使うハイブリットで行っており、人間の評価との相関は 0.88 と高く、専門家 3 人との一致率は 83.33%であった。ただし、短文の評価は難しく、中学校 3 年生くらいの作文から活用が適切であるとした。

新たに加えた CSLA の精度検証において、A1 から A2 が全体的にあまり上がらない一方で急激に上がっている結果も見られ、さらなる検証が必要であるとした。

以上のような理論的な解説の後、CLaLA: CEFR-based Language Level Analyzer (学校版) の紹介があり、参加者が ID を登録し、実際に使用した。CLaLA には、教室管理 (共通課題の設定)、実際に英語を使える力を測る Speaking と Writing の評価ができる上、表現などに関する詳細なフィードバック、コーパス的なエラーの分析といった機能がある。また、生徒や学生が楽しんで学習できる機能として、フィードバックトーンの設定 (例えば、ギャル先輩、とても優しい先生、など)、英作バトル (どの英作

文が良かったかランキングが発表される)、英作アリーナが実装されている。また、個人の習熟度に合わせた学習に活用できるテストモードや AI 会話も搭載されている。ただし、AI は優しいので判定も優くなる傾向があるため、自分ではできると過信しないことも重要であった。

ここまでの講演で大切なことは、どう AI を授業で使うか、にあった。内田先生は、学術的な検証を経た AI システムを教育現場に普及させ、学術的な分析結果を学習者や学校に提供し、学習・指導のプロセスを改善することを目的としている。このためには、初級者のデータ、時系列のデータが不足し、予算の限られている義務教育への普及が課題であるとした。今後は、システムをライセンス化し、九州大学が起業推進のために設立した株式会社 OPI にライセンスを譲渡するなどにより、義務教育にできるかぎり安価に提供できるようにしたいと語った。

講演後の質疑応答では、CLaLA の体験時に日本人らしい発音がどれくらい認知されるかを試すため I want to visit every day. と録音したところ、判定できたがカタカナになったものがあった。応答として、日本語に近い英語を話すとカタカナになるのはありえる。高校で使う分には満足な結果出ているが、課題はあるとした。また、CSLA のスピーチレコグニションで A1 から A2 につれて上がってしまうのは、Word per Minutes(WPM)が上がると、WPM が流暢性の指標になるため、英語力が上がっていくレベルでそういう現象が出るのか、あるいは、A1 から A2 でいきなり高くなることに関係しているのかもしれない、といった質問があった。内田先生からは、発音を判定はしていないため、音質を判定できるようにすれば流暢性の指標をより詳しくできると思うと回答があった。

AI によって発信力が高まり、世界中の人々とすぐに意思疎通が図れる日は近いのかもしれないが、言葉は文化であることを忘れず、語彙や表現に示される文化をも理解できるような学習は、尊重や思慮を生み、より円滑な人間関係につながる想いは持ち続けたい。

報告者：藤原 和美 (大阪教育大学)

報告 2026 年度 関西英語教育学会 会員総会

開催日：2026 年 6 月 13 日(土) 会場：大阪教育大学 天王寺キャンパス

2026 年度会員総会では、坂本南美先生（同志社大学）による司会進行のもと、議長に佐藤健先生（神戸大学）が選出され、2025 年度活動報告および決算報告、会計監査報告、2026 年度活動計画および予算案などについて報告・提案がなされ、承認されました。

1. 2025 年度活動報告

◆関西英語教育学会 2025 年度（第 31 回）研究大会

日程：2025 年 6 月 7 日（土）・8 日（日）

会場：同志社大学 今出川校地（烏丸キャンパス）、
164 名参加

内容：講演 2 件、研究発表・事例報告 20 件、企画ワークショップ 4 件、公募ワークショップ 1 件

◆全国英語教育学会第 50 回記念埼玉研究大会

期日：2025 年 8 月 9 日（土）・10 日（日）

会場：獨協大学（西棟）

主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育学会・九州英語教育学会）

担当地区学会：関東甲信越英語教育学会

◇関西英語教育学会担当プログラム【課題研究フォーラム（1 年目）】

タイトル：生身からのことばで語る—AI 時代の英語教師の成長—

コーディネーター：山本 玲子（京都外国語大学）

提案者：柳瀬 陽介（京都大学）

長嶺 寿宣（龍谷大学）

指定討論者：吉田 真生（京都大学大学院生）

◆ セミナー・共催行事

◇第 63 回 KELES セミナー

日程：2025 年 10 月 5 日（日）

開催形態：オンライン、70 名参加申込

テーマ：理論と実践の往還から、教育研究の意義と具体的実践を探る

シンポジウム “Where Practice Meets Theory: A Dialogue between a Researcher, a Practitioner, and the Audience”

講師：佐藤 臨太郎先生（奈良教育大学）

泉谷 忠至先生（近畿大学附属高等学校・中学校）

◇第 64 回 KELES セミナー

日程：2025 年 11 月 3 日（月・祝）

開催形態：オンライン（Zoom）、73 名参加申込

テーマ：英語で育てる心と視野—子どもたちのグローバルマインドと人間力を育む授業—

講演 1「今後グローバル社会で子ども達に求められる能力を育む授業実践～小学校編～」

講師：中村 直紀先生（賢明学院小学校）

講演 2「いつもの授業で心を育てる—実践から見た原則とヒント—」

講師：柳田 綾先生（桜花学園大学）

鈴木 駿吾先生（名古屋大学）

◇第 65 回 KELES セミナー

日程：2025 年 12 月 20 日（土）、46 名参加

会場：関西大学 梅田キャンパス 4F 多目的ルーム「KANDAI Me RISE ラボ」

テーマ：確かな学力伸長のための中高接続

講演 1「『生徒自身の英語』を育てる授業デザイン—パフォーマンス課題を核に、探究的学びと小・中・高接続を背景にして」

講師：増見 敦先生（神戸大学附属中等教育学校）

講演 2「中高 6 年間を見据えた学校英語教育への提言」

講師：臼倉 美里先生（東京学芸大学）

◇第 29 回卒論・修論研究発表セミナー

日程：2026 年 2 月 8 日（日）

開催形態：大阪教育大学 天王寺キャンパス（中央館）、発表 17 件、62 名参加申込

スペシャル・トーク「英語学習・指導を支える三
本柱：モチベーション、エンゲージメント、ウ
ェルビーイング」
講師：廣森 友人先生（明治大学）

大学）
メンバー：柳瀬 陽介（京都大学）・長嶺 寿宣（龍
谷大学）・吉田 真生（甲南女子大学）

◆ 課題研究プロジェクト

テーマ：「生身からのことばで語る—AI時代の英
語教師の成長—」
研究期間：2024～2026年度、3カ年
プロジェクト・リーダー：山本 玲子（京都外国語

◆ 広報・刊行物

◇ニューズレター 年4回発行（7月、11月、1月、
3月）
◇紀要『英語教育研究』第49号刊行
◇会員情報誌『KELES ジャーナル』第11号刊行

2. 2025年度決算報告

議案 2. 2025年度 決算報告

■収入の部（単位：円）				
項 目		2025年度予算額	2025年度決算額	備 考
1	前年度からの繰越金	2,884,908	2,884,908	
2	学会年会費	2,444,000	2,340,000	全国英語教育学会年会費も含む
3	参加費	95,000	135,992	関西英語教育学会第31回研究大会、KELESセミナー（第63/64/65回）
4	販売・掲載料	30,000	20,000	KELES ジャーナル、論文掲載費
5	その他	150,000	148,376	全国英語教育学会からの事務局補助費
計		5,603,908	5,529,276	

■支出の部（単位：円）				
項 目		2025年度予算額	2025年度決算額	備 考
1	通信費	136,160	126,511	JASELE 埼玉研究大会案内送付、HP サーバー管理費、振込手数料
2	研究費	466,000	486,532	講師謝礼、プロジェクト費、KELES ジャーナル執筆料、研究大会弁当・飲物代
3	印刷費	570,000	385,000	紀要『英語教育研究』・会員情報誌『KELES ジャーナルデータ』制作、J-Stage 登録代行
4	会議費	200,000	72,289	セミナー会場費、拡大理事会・セミナー弁当・飲物代
5	交通費	190,000	164,555	講師・理事・幹事交通費
6	事務費	240,000	198,000	ウェブサイト改修費用
7	全国英語教育学会	568,000	548,000	2,000円×274名
8	予備費	30,000	0	
9	名簿管理業務委託費	0	0	
計		2,400,160	1,980,887	

項 目	2025年度予算額	2025年度決算額	備 考
収入金額	5,603,908	5,529,276	
支出金額	2,400,160	1,980,887	
差引残高	3,203,748	3,548,389	次年度への繰越金

2026年 6月 2日

関西英語教育学会（KELES） 会計担当幹事
三木 浩平

3. 2026 年度活動計画

◆関西英語教育学会 2026 年度（第 32 回）研究大会

日程：2026 年 6 月 13 日（土）・14 日（日）
場所：大阪教育大学 天王寺キャンパス（中央館）
内容：講演 2 件、企画ワークショップ 3 件、企画
フォーラム 1 件、研究発表・事例報告 13 件

◆全国英語教育学会第 51 回岡山研究大会

(<https://jasele2026.ivory.ne.jp/>)

期日：2026 年 8 月 22 日（土）・23 日（日）
会場：岡山大学
主催：全国英語教育学会（地区学会：北海道英語
教育学会・東北英語教育学会・関東甲信越英語
教育学会・中部地区英語教育学会・関西英語教
育学会・中国地区英語教育学会・四国英語教育
学会・九州英語教育学会）

担当地区学会：中国地区英語教育学会

◇関西英語教育学会担当プログラム：課題研究フォーラム（2 年目）

テーマ：生身からのことばで語る—AI 時代の英語
教師の成長—
コーディネーター：山本 玲子（京都外国語大学）
提案者：山本 玲子（京都外国語大学）
柳瀬 陽介（京都大学）
長嶺 寿宣（龍谷大学）
吉田 真生（甲南女子大学）
指定討論者：能勢 誠（八幡市立橋本小学校）

【概要】本研究は、AI 時代においても「生身のことば」が英語教師の成長のために不可欠であることを、さまざまな教師の語りの事例から例証することを目的とした。研究 1 年目には「教師は、いかに自分の感覚を信頼に足るものにすることができるのか」とのリサーチクエスチョンを立て、インタビュー対象者の教師が、経験を積み試行錯誤を繰り返しながら自分の感覚を信頼していく過程を明らかにした。2 年目は「教師は、いかにして生身からの教師のことばを語るができるようになるのか」というリサーチクエスチョンを立て、教育現場の事例をさらに収集し、教師成長の観点からの分析、さらに AI と対比した人間の言語使用の観点からの分析を行った。

◆セミナー・共催行事 ※日程および開催形態は変更 する場合があります。

第 66 回 KELES セミナー

2026 年 10 月 4 日（日）オンライン（Zoom）

第 67 回 KELES セミナー

2026 年 11 月 8 日（日）オンライン（Zoom）

第 68 回 KELES セミナー

2026 年 12 月 20 日（日）関西学院大学大阪梅田
キャンパス

第 30 回卒論・修論研究発表セミナー

2027 年 2 月 11 日（木・祝）大阪教育大学天王
寺キャンパス

◆課題研究プロジェクト（継続）

◇テーマ：「生身からのことばで語る—AI 時代の英
語教師の成長—」（2024～2026 年度、3 か年）
プロジェクト・リーダー：山本 玲子（京都外国語
大学）
メンバー：柳瀬 陽介（京都大学）・長嶺 寿宣（龍
谷大学）・吉田 真生（甲南女子大学）

◆広報・刊行物

◇ニューズレター 年 4 回発行予定（7 月、11 月、
1 月、3 月）

◇紀要『英語教育研究』第 50 号を 2026 年度末に刊
行予定

◇学会情報誌『KELES ジャーナル』第 12 号を 2026
年度末に刊行予定

※総会の議案 6.4 のとおり、2026 年度発刊分から以
下のように名称を変更する。

旧名称：紀要『英語教育研究（SELT）』

新名称：学会誌『関西英語教育学会誌（KELES
Journal）』

旧名称：会員情報誌『KELES ジャーナル』

新名称：会員情報誌『KELES Forum』

4. 2026 年度予算案

議案 5. 2026 年度予算案

■収入の部（単位：円）				
項 目		2025 年度決算額	2026 年度予算額	備 考
1	前年度からの繰越金	2,884,908	3,548,389	
2	学会年会費	2,340,000	2,458,000	一般会員 321 名，学生会員 39 名，賛助会員 11 社 全国英語教育学会年会費も含む
3	参加費	135,992	100,000	研究大会，各種セミナー
4	販売・掲載料	20,000	20,000	KELES ジャーナル，論文掲載費
5	その他	148,376	150,000	全国英語教育学会からの事務局補助費
計		5,529,276	6,276,389	

■支出の部（単位：円）				
項 目		2025 年度決算額	2026 年度予算額	備 考
1	通信費	126,511	150,000	郵送費，振込手数料，HP サーバー管理費
2	研究費	486,532	600,000	研究大会・各種セミナー運営費（講師謝金，昼食弁当 および茶菓等を含む），依頼原稿執筆料，研究プロ ジェクト経費
3	印刷費	385,000	280,000	学会刊行物データ制作費，コピー代など (J-Stage 登録代行費*)
4	会議費	72,289	200,000	研究大会及び各種セミナー会場費，拡大理事会運営費
5	交通費	164,555	200,000	交通費，宿泊費
6	事務費	198,000	80,000	学会ウェブサイト一部更新，文房具等
7	全国英語教育学会	548,000	548,000	2,000 円×274 名
8	名簿管理業務委託費	0	450,000	会員管理サービス
9	予備費	0	200,000	新規事業関連費
10	次年度への繰越金	3,548,389	3,568,389	
計		5,529,276	6,276,389	

* 2026 年度学会刊行物（学会誌『英語教育研究』，『KELES ジャーナル』）は 2026 年度末までに刊行されるが，J-Stage 登録代行費の支払いは 2027 年度（4 月ごろ）に執行されるため，これらの予算は次年度の会計に計上することとする（概算 130,000 円）。

5. 2026 年度役員一覧

会 長

横川 博一（神戸大学）

副会長

今井 裕之（関西大学）

顧 問

織田 稔（元関西大学）

瀬川 俊一（京都府立大学名誉教授）

村田 純一（神戸市外国語大学名誉教授）

吉田 信介（関西大学名誉教授）

幹事長（副会長兼務）

篠崎 文哉（大阪教育大学）

紀要編集委員長

福島 玲枝（畿央大学）

幹 事

大脇 裕也（大阪商業大学）

北野 梓（大阪教育大学）

佐古 孝義（立命館大学）

杉浦 悠真（福井工業高等専門学校）

谷野 圭亮（大阪公立大学工業高等専門学校）

寺嶋 宏樹（桃山学院大学）

中西 洋平（関西大学大学院生）

鳴海 智之（兵庫教育大学）

服部 拓哉（立命館大学）

三木 浩平（近畿大学）

南 侑樹（神戸市立工業高等専門学校）

山形 悟史（岡山大学）

理 事

赤松 信彦（同志社大学）

泉 恵美子（関西学院大学）

加賀田 哲也（大阪教育大学）

黒川 愛子（帝塚山大学）

今野 勝幸（龍谷大学）

齊藤 倫子（関西学院大学等非常勤講師）

佐藤 臨太郎（奈良教育大学）

長谷 尚弥（関西学院大学・芸術文化観光専門職大学非常勤講師）

増見 敦（神戸大学附属中等教育学校）

水本 篤（関西大学）

宮崎 貴弘（神戸市立神港橘高等学校）

柳瀬 陽介（京都大学）

吉田 達弘（兵庫教育大学）

紀要編集委員

今村 一博（武庫川女子大学）

笠巻 知子（京都外国語大学）

橋本 健一（大阪教育大学）

矢形 勝秀（神戸市外国語大学）

山本 玲子（京都外国語大学）

会計監査（2名）

杉浦 香織（立命館大学）

平野 亜也子（京都産業大学）

※ 同職位内では50音順。下線は新任の役員を示す。

6. その他の審議事項

- (1) 研究大会・セミナー運営や名簿管理等の業務負担増加を踏まえ、幹事人数の増加を恒久化することが原案通り承認された。
- (2) 刊行物名称の変更並びに紙媒体刊行の廃止に伴う規約改正について、原案通り承認された。

退任のご挨拶

幹事を退任される先生方

坂本 南美先生（同志社大学）

2年間の幹事在任中、多くの先生方とのご縁に恵まれ、学会運営を通してたくさんの学びをいただきました。幹事会ではそれぞれのお立場や考えを尊重しながら協力して活動することができ、温かな仲間に支えられた2年間でした。ご一緒くださった先生方に心より感謝申し上げます。今後も一会員として学び続けながら、本学会のさらなる発展をお祈りしております。

宮崎 貴弘先生（神戸市立神港橋高等学校）

4年間にわたり、KELES ニュースレターの発行に際し、多くの先生にご執筆を快くお引き受けいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

毎回、原稿を楽しく拝読し、多くの刺激と学びをいただきました。今後とも、本学会のさらなるご発展と、新幹事の先生のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

学会事務局からのお知らせ

◆学会誌『関西英語教育学会誌（KELES Journal）』 第50号 投稿論文募集

関西英語教育学会では、学会誌『関西英語教育学会誌（KELES Journal）』（旧名称：紀要『英語教育研究（SELT）』）第50号（2027年3月刊行予定）への論文投稿を募集します。会員の皆様から多数のご投稿をお待ちしております。詳細は下記URLからご覧ください。

https://www.keles.jp/activity/selt/submission_guidelines/

投稿受付締切 2026年8月31日（月）22:00

*なお、第49号より紙媒体での刊行を廃止し、電子媒体（J-Stage）での公開のみとなりました。

◆各種お問い合わせ先

年会費、学会誌、セミナー、入退会などに関するお問い合わせは、学会ウェブサイトの「お問い合わせフォーム」をご利用ください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfTFG1bUpHC84nkkd2zTyvniFfVUD1ve_AfA557qcNUH_YLHdg/viewform

*2026年1月末時点で年会費が未納の方には「2025年度会費納入のお願い」を送付しておりますが、同2月末時点で年会費が未納の場合は、2025年度末をもって退会扱いの処理をさせていただきます。会員を継続される場合はご連絡ください。

◆メールアドレスご確認のお願い

本学会ではニュースレターはPDF化して会員の皆様宛に一斉メール配信をしております。

もし届いていない場合は、お手数ですが、下記フォームにて、メールアドレスを登録・更新くださいますようお願いいたします。

<https://forms.gle/deRoVkjPDa9iMKkr6>

